

「曖昧」な日本語を再認識：日本語教育の立場から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 曉鐘, 曹, ?紅 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/733

「曖昧」な日本語を再認識

—日本語教育の立場から—

楊曉鐘 曹珺紅

1 はじめに

よく「日本語はとても曖昧である」^①という批判じみた話を聞かされる。これは、日本人社会のみならず、世界的にも、もはや定着した見方のように思われる。ところが、こういった論調は話の聞き手の立場から、意味的に曖昧なのか、あるいは、言語学的な角度で論じられているのか等については、不明なまま、学者から、庶民一般にまで浸透してしまったように思う。

世界的範囲を見渡せば、中国語でも、英語でも、曖昧な表現のない言語はどこにも存在しないように思う。そして、日本語を使って、はっきりと話をしようと思えば、十分にできるのだ。だから、構造的に日本語は曖昧であることはないと思う。

それなら、どうして日本語は曖昧であると言われているのだろうか。よく問題にされている日本人の言い回しから考えていきたいと思う。

2 よく問題とされている日本語の数々

2.1 日常会話の類

「かもしれない」や「かも」は日本人が常用している言葉の一つである、西欧諸国のビジネスマンの間では日本人のことを「maybe」民族と呼んでいるといわれているほどだ。最近、そのような傾向がいっそう強まる気配を呈しており、話し手本人の感触などをあらわすような場合でも使われるようになってきている。例えば、何かを食べたときに、「これ、おいしいかも」。好きだと思うものに対して、「好きかも」。行きたいと思っけていても「行きたいかも」と言っている。

日本のテレビ番組を見ていると、「…じゃないでしょうか」も、よく聞かされている印象深い言葉の一つである。

日本の国会議員には「乱闘手当て」という名目のものが実は支給されているそうだ。その廃止が求められたことで、メディア関係者が「街の声」を聞いたところ、

「それは無駄遣いじゃないですか」「それは廃止すべきじゃないでしょうか」「困るじゃないですか、廃止してもらわないと」

と「…じゃないか」の連続だ。

あまり好ましくないことなので、インタビューに答えている人は話しづらいから、「…じゃないか」を使っているのだろうと思っていたら、

巨人の長嶋茂雄終身名誉監督が7月3日の巨人・広島戦で"復帰"することが決まったことについての街の声も「元気な姿が見られていいじゃないか」とか、「よかったじゃないか、巨人にとっては」……。

つまり、ことの良し悪しは関係せず、当の本人のことや本人の考えなのに、わざと断定を避けて「…じゃないか」を使って言っているのである。

これ以外にも、

「オタバコのほう、お飲みになれますでしょうか」「携帯などお持ちですか？」

等のように、断定を避けるという意識から日本の若者が使い出していると指摘されている^②。

2.2 多義語の類

「日本人はどういう時に、どのような意味で、「どうも」を使っているのか、さっぱりわからない」という中国人留学生がいる。このような感想を抱いている外国人は少なくないと思われる。

「どうもだめだな」「先日はどうも」「先ほどはどうも」「どうもありがとう」「どうもすみません」「これはどうも」「どうも、どうも、ご面倒をおかけしました」等のように、日本人は「どうも」を連発する。三省堂から出版された「大辞林」^③で、「どうも」について調べてみると、次のように出てくる。

どうも、

(副)

- (1) (多く打ち消しの語を伴って) できるだけやってみても。いろいろ努力しても。
- (2) 原因・理由が判然としない意を表す。はっきりしないが、なんとなく。どうやら。
- (3) 軽い驚きや困惑の気持ちを表す。何とも。いやはや。
- (4) 感謝や謝罪の気持ちを表す挨拶の語に添えて、その意を強調する。後半を略して感動詞的にも用い、また、くだけた挨拶語としても用いる。

多義語であるがゆえに、日本人独特な語感、つまり、さまざまな意味を一つの語句で表現したために、中国人留学生には曖昧だなという印象を与えてしまったのであろう。日本人では自然に使い分けをし、はっきりした意思表示のつもりで「どうも」を使っているにもかかわらず、日本語は曖昧だという印象を与えてしまったのではなかろうか。

これに似たような言葉や表現が日本語に数多く存在している。

例えば、「くやしい」という言葉には、

「試合に負けてくやしい」「彼はやりたいことはやった。くやしい死ではない。」「もっと気をつければよかったと思うと、くやしい」などの用例ができる。

あるいは、「しかたがない」という日本語には

「女だからしかたがないんじゃないのといってあきらめてしまう場合もある」「選挙に負けたのだから、文句をいってもしかたがない」「娘がかわいくてしかたがない」^④など。

日本語には類似の表現はありすぎて、枚挙にいとまがないぐらいだ。これで曖昧といわれてもわからないでもないような気がする。

2.3 政治家用語の類

よく日本の政治家の発言は「言語明瞭、意味不明」といわれている。たとえば、「前向きに検討します」とか、「諸般の事情から確答いたしかねます」とか、「立场上答弁を差し控えさせていただきます」など、よく耳にする言葉である。

そのなかで、もっとも有名な一例として、ノーベル平和賞を受賞したかつての佐藤栄作元日本国総理大臣の「善処します」発言である。

この発言がなされたと伝えられたのは1970年10月、ワシントンで、日本の佐藤首相とアメリカ大統領のニクソンとの首脳会談の席上である。

当時、ニクソン大統領は日本からの低コストの繊維製品輸入急増のため、アメリカの関係業界から、強い圧力を受けており、首脳会談の機会に佐藤首相に対して、輸出の自主規制などの適切な処置をとるように要望した。それに対する佐藤首相の答えは「善処します」だった。

この対話の結果、ニクソン大統領は、佐藤首相によって日本国内で繊維製品の輸出を抑える何らかの具体的な措置がとられると確信した。しかし、その後、日本では、繊維製品に関する規制の動きは何も起こらなかった。約束を破られたと思った大統領は憤慨し、これがその後の「ニクソン・ショック」につながったとされる^⑤。

このエピソードについては、幾とおりの解釈もあるが、日本人特有の「丁寧さ」からにせよ、あるいは、日本の政治家のこの「善処」という言葉に対する暗黙の了解にせよ、そのいずれも、根底には日本語の曖昧さが潜んでいるといわれている。

3 日本語は本当に曖昧なのか？

以上のように、日本人の日常会話、日本語の語彙、そして、日本の政治家の発言といった側面から、例をあげて紹介してきたが、日本語が曖昧であるといわれている例はほかにもたくさんあることは事実である。たとえば、日本語は主語がないとか、人称代名詞がよく省略されているとか……。しかし、それらを全部総括して考えると、いずれも外国語、外国人の表現と比べていつているものであり、肝心な日本人、日本語は？となると、話は違ふと私は思う。

結論から申し上げると、私は言語としての日本語は曖昧であるとは思わない。日本人のしゃべ

っている日本語自体、文としての意味ははっきりしていると思っている。同じく前文で挙げた例を見てみることにしよう。

まず、「…かもしれない」についてだが、「好きかも」「おいしいかも」といった本人の気持ちの伝わり方だが、別に本人は自信がないとか、はっきりわからないというものではなくて、「私は好きだが、私はおいしいと思うが、あなたはそう感じるかどうか」という日本人固有の相手に対する配慮という心理から、「かも」を使っている。

その次の「…じゃないですか」もまったく同じ次元のものだと思う。

税金の無駄遣いといわれている「乱闘手当て」の廃止は誰が考えても廃止すべきだ。マイクを差し出されている記者の質問がいかにも中立的なもののように聞こえるが、聞かれた本人は「私は廃止すべきだ、あなたもそう思わないか、そう思っているだろう」というような意味合いが含まれていると思う。

「携帯など、お持ちですか」というのは、まさしく「携帯電話」を持っているかどうかを確認しているのであり、いわゆる日本人の「丁寧さ」をフルに使っている表現である。「タバコのほう、お飲みになれますでしょうか」も、別にほかの飲み物を含めて聞いてのいるのではなく、座席の喫煙席のほうがいいか、それとも、禁煙席にするのかというお客さんの要望を聞くものである。だから、形では、はっきりしていないと思われるかもしれないが、聞く側も聞かれる側もその言葉が何を意味しているのかははっきりわかっていると思われる。

日本の政治家の発言も同じように理解できると思う。

曖昧だといわれているのは、日本語の問題ではなくて、話をする本人が話を曖昧にしようという考えで、わざとそういっているのであり、そのように感じられたのである。そして、付け加えて申し上げると、日本の政治家の型にはまったような発言も、実は文化を共有している日本政治家の間や、日本人の間では、その意味もはっきりしている。たとえば、前述の「善処します」も、「政治家の用語としては、さしあたっては、なんの処置もしない」という意味である。

日本語には多義語の存在があるから、外国人には分かりにくい、外国語に訳しにくいとの印象を与えていることは事実であるかもしれないが、それで、日本語は曖昧であるとの結論には結びつかない。というのは、世界に存在しているすべての言語の中から、どれを取ってきても、多義語がないものはないからだ。中国語の場合では、たとえば、「白」という中国語の言葉がある。「現代漢語辞典」^⑥を引いてみると、実は14項目の意味が並べられていることがわかる。中には、名詞として、「白」(しろ)もあれば、形容詞としての「白开水」(白湯)、あるいは、「白了他一眼」(彼をにらみつけた)のように、動詞としての使い方もある。ある意味では、この「白」という言葉は多義語である上に、その品詞まで多様に変化しているため、もっと分かりにくいはずだ。だからといって、中国語は曖昧であるとはいえないし、実際、そうもいわれていない。日本語が「曖昧」であるというわれわれ外国人の見方はまさに、日本人の言語文化、表現心理がよく理解できていないことから、生じたものであると思えてならない。

4 日本語教育における「曖昧」な日本語の教え方

4.1 日本文化、日本人の表現心理をよく理解し、常に念頭におくこと

それでは、今度はこの「曖昧」と思われている日本語を、母国語ではなく、外国語として習得している人たちに、どのように教えていくべきかについて、その注意すべき点を考えていきたいと思う。

上述のように、単一民族国家である日本では、文化を共有している日本人にしてみれば、なんでもない、ごく普通のような表現でも、外国人にとって、非常に驚異に思ったり、不思議がったり、理解できなかったりすることがしばしばある。だから、真の日本語教育をしようと思えば、まず、文化差異の問題を常に念頭に置き、日本文化、日本人の表現心理から切り開いていかなければいけない。

いままで、中国人に日本語教育をする立場から、中国式日本語の類型や成因などについて、いくつか小論⁷⁾を発表してきた。これまでの日本語教育の反省点といえば、あまりにも、発音、文型、文法などの言語学的要素を重視しすぎて、肝心の日本文化的な要素、日本人の表現心理をおろそかにしてきたがために、われわれ外国人が使う日本語は、日本人が違和感を感じられるものになってしまったのだと思う。

日本人の価値観といえば、もっとも顕著なものは「和を以って尊しとなす」というものだと思う。この日本人の座右の銘が、日本人社会に同質性と集団性を特徴付けたと思われる。いうまでもなく、日本人の言語生活もそれを原点にしている。

集団の中では、日本人はなによりも「和」を重んじているので、周囲の人や、話の相手には悪い、相手を傷つける、困らせる、相手に恥をかかせる……といった言語行動を極力避けているのである。このいたわりを美德としている日本人だから、「争わない」「遠慮する」ことが多い。また、当然のように、「かどが立つ」ことを悪徳と考えている。それで、前にあげた例のように、佐藤栄作首相の「善処します」発言があったり、「…じゃないか」とか、「……のほう」といった表現が使われるのだと思う。つまり、日本人は意識して、直接から間接へ、直裁から婉曲へと話を持っていき、物事をわざと曖昧に表現して、どぎつさを回避する表現方法をとっていると思う。

そして、日本人の伝統的な文化は「察し」の文化であり、言葉のやり取りを少なくしようとする文化であって、自分の行動の基準を他者の心に求める傾向にある。自己主張をするにしても、相手の感情をいたわりながら、やわらかく言い分を通すのが最善だと考えている。だから、なるべく相手に嫌われないように、うらまれないように、と常に配慮をしている。

それで、実際の日常生活の中では、「今日はいいい天気だね」のように、日本人はよく「ね」「わ」「わね」などの終助詞を愛用し、常に相手に共感を求め、相手の気持ちを確かめながら、話を進めている。

相手の意見と食い違いがあった場合でも、日本人は「そっちにも言い分があるだろうが……」

「あなたのお考えはごもっともですが……」といった譲歩の表現をまず話の頭に持ってきて、相手の気持ちを組み込んでから、反論していくケースが多い。

日本語の質問の受け答えをするときに、「はい」と「いいえ」という二つの言葉がある。中国人の日本語学習者は、それを「是」「不是」のように理解し、使われがちだが、実際のところはどうだろうか。

日本語教育の専門家である水谷修氏によると、日本人がふだんの生活の中では、「いいえ」と言うのは、二つの場合ぐらいしかないそうだ。一つは、へりくだりの場合、たとえば、「あなたは英語がよくおできになりますね」と言われると、「いいえ、とんでもない。私は……」と、この場合ははっきりと「いいえ」と言う。もう一つは、相手を励ましたり、慰めたりする場合である。相手が「私はやはりだめな女なのね」とでも言う、と、「いいえ、あなたは本当は力があるんですよ」と、こういう場合には力強く「いいえ」と言う。いかにも日本人らしい言語行動だ⁸⁾。

だから、われわれの日常の日本語教育の中に、上記のような日本人の言語表現の根底に潜んでいる文化的な要因や表現心理を徹底的に取り入れることにより、はじめて、真の日本語教育ができると思う。

4.2 日本文化を尊重すること

もう一点是非心がけて取り込んでいかなければいけないことは日本語を客観的に見ることだと思う。

冒頭でも述べたが、日本語は曖昧だとよく批判されていると思うが、その理由もわからないことでもない。ただ、日本語教育に携わっている者として、そういった偏った考えを持つてはいけないと思う。というのは、日本語は日本文化の一部であって、その日本文化自体は優れているとか劣っているということはないからである。日本語は自分の母国語と違って、曖昧のように感じているかもしれないが、それで、日本語は曖昧であるからよくないとか、劣っているとかといった考えになってしまったのでは、正しい日本語教育もできないと思う。教鞭をとる立場にいる人間こそ、曖昧さや婉曲を好むという日本人の性向が日本人の根本に根ざしているものだとしてよく理解しなければいけないと思う。

5 結語

日本語は曖昧だといわれているが、日本人の問題にしている日本語の曖昧さと外国人が感じている曖昧さは違うと思う。その根底に横たわっている原因はほかでもない、まさに文化的な違いだと思う。これから、「曖昧」といわれている日本語を曖昧ではなく、はっきりと分かりやすく、日本語らしく教えるためには、日本文化的な要素をより多く取り入れ、総合的な日本語教育を目指さなければならないと思う。

注

- ① これまで数多くの日本人論、日本語論、日本文化論の著書が出ている。それらの中では、いずれも日本語の曖昧さに言及している。ここで、参考になったものだけ羅列しておく。金田一春彦「日本人の言語表現」(1975 講談社現代新書)、外山滋比古「言葉の習俗」(1971 三省堂新書)板坂元「日本人論理構造」(1971 講談社現代新書)パーンランド「日本人の表現構造」(1973 西山千訳 サイマル出版会)、多田道太郎「しぐさの日本文化」(1972 筑摩書房)、依田新・築島謙三編「日本人の性格」(1970 「現代心理学シリーズ」第2巻 朝倉書店)
- ② 橋本五郎監修 読売新聞新日本語取材班「新日本語の現場 困ってませんか? 職場の言葉」(2005 中公新書)による。
- ③ 書名:大辞林 第二版 編者:松村 明・三省堂編修所 (C) Sanseido Co.,Ltd. 2005
- ④ 例文は小松達也氏の「通訳の英語 日本語」(2003 文藝春秋)による。
- ⑤ 佐藤栄作の「善処します」発言は数多くの書物に取り上げられているが、ここでは、小松達也氏の「通訳の英語 日本語」(2003 文藝春秋)を引用。
- ⑥ 書名:現代漢語詞典 修訂本 編者:中国社会科学院語言研究所詞典編纂室 1998
- ⑦ 楊曉鐘「日本学研究論文集 中国語式日本語の原因を探る」2001 陝西人民出版社「中国式日本語の類型とその成因について」2004 西安交通大学出版社を参照。
- ⑧ 金田一春彦氏の「日本語の特質」(1991 日本放送出版協会)を引用。

<引用・参考文献>

- 金田一春彦 [1988年]「日本語 新版」(上、下)岩波新書
 [1991] 「日本語の特質」日本放送出版協会
 [1998] 「日本語教室」ちくま学芸文庫
- 相良 亨 [1980] 「誠実と日本人」ぺりかん社
- 佐久間 鼎 [1941] 「日本語の特質」育英書院
- 小松 達也 [2003] 「通訳の英語 日本語」文藝春秋
- 芳賀綏 [1979] 「日本人の表現心理」中央公論社
 [2004] 「日本人らしさの構造」大修館書店
- 水谷修 李徳奉 [2002] 「総合的日本語教育を求めて」国書刊行会
- 柴田 武 [2002] 「その日本語、通じていますか」角川書店